

出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための 文献研究の記録（第1報）

— 最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨 —

香川貴志^{*1}

General Articles and their Abstracts Regarding Izumo Taisha Shrine,
Iwami-Silver-Mine, Hagi and Tsuwano (Part 1)

KAGAWA Takashi

抄録：本稿は，2021（令和3）年度の前期集中講義として実施した学部開設科目「地理学研究」と大学院開設科目「地理学特論Ⅱ」の事前学習の記録である。その内容は事前学習のアウトライン，および事前学習で扱った文献の要旨である。後者は本稿の付録としてまとめており，今回の対象地域を巡る際に効率的に現地を学ぶ資料として活用できる。文献要旨は，地理学的考察を含む対象地域に関わる比較的新しい文献80件に及ぶ。対象となる文献数が多いため，本稿には文献の検索とその方法，文献要旨をまとめる担当者の決定，および出雲大社13件，萩20件の文献要旨をまとめた。残り47件（石見銀山と津和野）については本稿の続編である第2報（香川，2022a）に，また授業全体の流れと現地授業については香川（2022b）にまとめた。

キーワード：世界文化遺産，重要伝統的建造物群保存地区，文献研究，出雲大社，萩

I. 地域研究における文献研究の重要性

地理学をはじめ，地域経済学や地域社会学などの隣接する学問領域では，大多数の研究において研究対象地域としてのフィールドが存在する。そこには長年にわたって蓄積されてきた先学による研究事例があり，当該地域を研究対象とする者は大なり小なり先行研究を参照しなければならない。しかし，学生たちの卒業論文を審査していると，その大多数が明らかに対象地域や対象テーマについての先行研究を上手く整理できていない。このことは自身の研究の位置付けの弱さを露呈し，せつかくの学位論文の価値を下げてしまう。

そこで筆者は，奇数年に担当する「地理学研究」と偶数年に担当する「地理学特講」（いずれも学部対象の前期集中開講科目）において，文献精読と文献要旨作成を事前学習で課してきた。この作業は，いずれも学部と同時開講（ごく一部は大学院生に適した内容に調整して実施）の大学院科目の「地理学特論Ⅱ」（奇数年開講）と「地理学特論Ⅰ」（偶数年開講）でも同様である。

この作業は，筆者が本学に着任した1991年度以降の比較的早い時期から行ってきたものの，事前学習で扱った約240字の文献要旨を推敲して残し始めたのは，2012年度後期の大学院授業の成果をまとめた香川（2013）が契機となっている。この論文が「後に同じ地域を訪問する際に大変

^{*1} 京都教育大学，同附属桃山小学校（併任）

参考になる」と好評を博したため、2014年度以降の前期集中授業で扱った文献要旨を文献集として残していくことにした。

文献要旨を指定文字数の範囲内でまとめる作業は、近い将来に受講生が教職に就いた際、スペースに制約が多い学年便りや学級新聞を作成するときに役立つように企画したものである。それと同時に文献要旨をまとめる作業は、論文を書くときに研究の系譜を把握するうえで大変に有用である。また、地理学が間口の広い学問領域であることから、選定される文献も多くの周辺領域（教育学、歴史学、社会学、政治学、経済学、都市計画学や地学などの理工系領域など）まで多岐にわたっており、視野拡大に資するところが大きいと考えられる。

ただ、多くの受講生は文献要旨の分量が1本あたり約240字であることを当初は甘く見る傾向にある。なぜなら、大多数の受講生が「字数が少ないので、すぐに書けると考えたが難渋した」という旨の感想を作業後に漏らすからである。しかし、卒業時に「卒論作成の過程では『地理学研究』や『地理学特講』で文献を精読して要旨をまとめた経験がとても役立った」という感想も多く得てきたので、文献要旨をまとめさせる作業の狙いは概ね果たしているといえるだろう。

従来の作業結果は、本誌『京都教育大学環境教育研究年報』のバックナンバーに収録されていて（香川、2015a;2015b;2016;2017a;2017b;2018a;2018b;2019;2020;2021）、すべて機関リポジトリを介して無償ダウンロードできる。さらに、上記の各論文より後に公刊された文献の要旨を利用者が追加していけば、各々の地域についての研究資料のアップデートができる。なお、文献要旨（本稿の付録）をまとめる素材となった文献類は、情報の重複を避けるため、敢えて本稿の参考文献欄には掲載していない。これは本稿の第2報（香川、2022a）でも同様である。

Ⅱ. 対象文献のリストアップ

対象文献の選定に相当な労力を要することを熟知している筆者は、この作業を訪問地域が決まった直後、つまりシラバス作成と並行して始めた。精読するための複写の際に必要な文献が探しやすいことに配慮して、単行本やそれに準ずる出版物、さらに報告書類は対象から割愛している。そのため、文献の模索にはNDL-OPACではなくCiNiiを利用した。

文献検索はCiNiiのシステム上でキーワード検索により実施した。検索ワードが汎用的あるいは限定的に過ぎると、ヒットする文献が過多または過少になってしまう（野間ほか、2017, pp. 67-68）ので、4つの対象地域では次に列記する検索ワードで文献を模索した。

出雲大社については汎用的な「出雲」、限定的な「出雲大社参道」「出雲大社門前町」を避けて「出雲大社」を使った。石見銀山に関しては、2010年に訪問した際の経験から参考文献が非常に多いことを知っていたため、「石見銀山」と「世界遺産」でのAND検索を試みたものの、広い領域をカバーしやすいことに配慮して、最終的には「石見銀山」だけで検索に励んだ。萩については、「萩」だけで検索した場合、植物の萩や論文著者の「萩原」姓や「萩野」姓などが多くヒットして文献を模索し難いことが判明したため、「萩市」を検索ワードとした。しかし、それでも茨城県の高萩市を対象とした地域研究文献が多数ヒットした。津和野に関しては「津和野」で検索しても過大な文献数には至らなかったため、これを検索ワードにした。

CiNiiを活用した最終的な文献検索は2021年4月28日に実施した。なお、出雲大社を除く3地

域については2010年8月に訪問経験があり、その際の文献研究で2009年以前の文献研究は筆者が済ませていたため、受講生に対してその要点を事前学習会や現地において口頭説明することにして、石見銀山、萩、津和野については2010年以降に刊行された文献に限定した。一方、出雲大社に関しては、今回が授業では初めての訪問となることから、選定対象を2000年以降に刊行された文献とした。

検索でヒットする文献を頁数やタイトルから精選した結果、4つの対象地域で選定された文献は、出雲大社が13件、石見銀山が37件、萩が20件、津和野が10件で、合計は80件に及んだ。本稿が第1報（当論文）と第2報（香川、2022a）に分割されているのは、このように要旨をまとめる対象文献が多いことによる。なお、当論文では、経緯説明等に相応の紙幅を要するため、出雲大社と萩に関する文献要旨だけを付録として格納し、残りの2地域（石見銀山と津和野）の文献要旨については、当論文の続編となる第2報の付録に譲った。

Ⅲ. 文献要旨の執筆担当者の割り振り

論文要旨の執筆担当者の割り振りは、次に示す①～④の目標のもとでの作業を繰り返して決定した。すなわち、①文献の収集と精読の負担均等化（担当する文献の件数と総頁数）を図ること、②要旨をまとめる手間の均等化（担当する論文の数の統一）を図ること、③他機関からの取り寄せ文献の共有（受け渡し）が容易なよう2人で1組のグループを構成すること、④少なくとも訪問地域4つのうち3つを担当できるようにすること、である。

文献80件のうち、他機関からの取り寄せが必要なもの（表1の「所在/頁数」欄ではRE、以下の本稿ではRE文献と記載）は45件、J-STAGE経由で無償ダウンロードが可能なもの（同JS、同JS文献）は8件、機関リポジトリから無償ダウンロードできるもの（同IR、同IR文献）は26件、地理学演習室に常備されている雑誌に掲載されているもの（同GE、同GE文献）が1件あった。上述した受講生の負担への配慮から、RE文献5件、JS文献1件、IR文献6件、GE文献1件の以上13件（計341頁）を筆者が担当することにした。その結果、受講生が担当する文献は、RE文献が40件、JS文献が7件、IR文献が20件、GE文献は0件となった。

受講生20名が担当する各々の文献は、最低2名の受講生に担当させた。これは、筆者が推敲に励む際の利便を視野に入れたためであり、異なる視点から書かれた要旨を比較することが推敲作業に有効だからである。具体的には、RE文献40件を各自4件ずつ担当（1件あたり2名が担当）させ、JS文献7件を各自1件ずつ担当（3件を4名、4件を2名が担当）させ、IR文献20件を各自2件ずつ担当（1件あたり2名が担当）とした。受講生各自の担当文献数は7件、担当頁数は58～73頁で、これらを一覧表にしたのが次頁および次々頁に見開きで示す表1である。

シリアル ナンバー	文献 記号	各文献の 筆頭著者	文献 発行	所在 頁数	分 野	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	F	F	F	F	F
						C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3
#47	G34	廣瀬文太郎	2015	RE23	歴史	●																		
#48	G35	廣瀬文太郎	2018	RE16	歴史																●	●		
#49	G36	藤原雄高ほか	2011	RE62	歴史	●																		
#50	G37	渡部孝幸	2010	RE05	計画		●														●			
#51	H01	池田廣司ほか	2016	IR11	教育											●					●			
#52	H02	石垣編集部	2012	RE05	観光		●																●	
#53	H03	梅木幹司ほか	2016	IR08	計画						●				●									
#54	H04	大槻洋二	2018	RE06	計画					●					●									
#55	H05	岡崎祐介ほか	2017	IR12	体育		●														●			
#56	H06]	2014	IR08	災害					●					●									
#57	H07	萩市観光協会	2015	RE12	経済	●																		
#58	H08	福島一人	2018	IR23	観光	●																		
#59	H09	古屋昭雄ほか	2018	RE20	歴史	●																		
#60	H10	三島幸子ほか	2017	RE09	計画		●														●			
#61	H11	村上佳代ほか	2010	JS09	計画				●				●	●							●			
#62	H12	村上佳代ほか	2015	JS08	観光											●					●			
#63	H13	村木名史ほか	2011	IR06	教育												●				●			
#64	H14	村木名史ほか	2012	IR06	計画				●									●						
#65	H15	村木名史ほか	2013	IR08	体育					●					●									
#66	H16	やまぐち経済月報編集	2016	RE10	観光		●																●	
#67	H17	山田真治	2016	IR06	教育					●						●								
#68	H18	横山順一	2012	IR10	災害			●													●			
#69	H19	横山順一	2015	IR08	災害																	●	●	
#70	H20	Zou Miao	2017	IR12	経済				●												●			
#71	T01	川崎瑞穂	2016	RE11	歴史						●			●										
#72	T02	佐藤宏之	2014	IR13	歴史		●						●	●									●	
#73	T03	多田泰之ほか	2014	JS18	災害	●																		
#74	T04	中林秀光ほか	2018	IR06	災害		●																●	
#75	T05	松島 弘	2012	RE06	歴史					●						●								
#76	T06	山路興造	2019	RE37	歴史	●																		
#77	T07	米本 潔	2019	RE18	歴史				●												●			
#78	T08	若槻 健	2019	RE06	教育																	●	●	
#79	T09	L. Kahlow	2017	IR13	歴史	●																		
#80	T10	L. Kahlow	2018	IR35	歴史	●																		

【文献記号】 Z:出雲大社, G:石見銀山, H:萩, T:津和野 (各地域内でシリアルナンバー付与した。(例)Z01~

【各文献の筆頭著者】 複数著者の場合は「ほか」を付記した。

【文献発行】 当該文献を含む雑誌の刊行年を記した。

【所在, 頁数】 GE:地理学演習室, IR:機関リポジトリ, JS:J-STAGE, RE:他機関より取り寄せ,

アルファベット2文字に続く数字は当該文献の頁数を示す。

【分野】 観光:観光地理学・ツーリズム, 教育:教育学・学校教育, 計画:都市計画, 経済:経済地理学・経済学,

交通:交通地理学・交通計画, 災害:災害・防災, 村落:村落地理学, 体育:体育行政学・スポーツ,

歴史:歴史地理学・歴史学・考古学

* 社会地理学や社会学, 文化地理学や文化・民俗は近接分野で最も近いと判断されるものに含めた。

【キーワード・要旨まとめ担当者】MC:引率者・筆者(香川), M1~M15:男子学生, F1~F5:女子学生(大学院生を含む)

* 特別な事情により途中で受講辞退した1名についても当初の担当者として表に含めている。現地授業だけをキャンセルした受講生は文献研究に取り組んでいる。

IV. 事前学習会

今年度の本授業科目は、全体の行程との関係から出雲市または松江市などで前泊し、電鉄出雲市駅で朝に集合するという行程を組んだ。そのため、1日目が5コマ(10時間)、2日目が5コマ(10時間)、3日目が2コマ(4時間)という総計が12コマ(24時間)の現地授業となった。本授業科目は単位数2の科目なので、指定時間数15コマ(30時間)が必要で、現地授業だけでは不足する3コマ(6時間)を事前学習に充当した。事前学習は1コマ(2時間)のものを3回実施した。実施日は5月15日(土)、7月3日(土)と7月31日(土)で、当初は全て食事を摂った後に指定教室(B5教室)で集合して、授業の狙いや現地授業の説明、文献精読の内容紹介と質疑などを予定していた。しかし、第1回事前学習会はCOVID-19拡大に伴う緊急事態宣言の発出などで対面形式での実施ができなかった。

第2回事前学習会は何とか対面形式で実施できた。この回では、文献要旨の執筆を促すとともに、第1回に比べて具体性を増した現地での授業計画を説明した。さらに、近年の大学入試や教員採用試験で頻出する地形図読図の演習を行い、現地で使用するフィールドノートも配布した。

第3回事前学習会も対面形式で実施できた。この回には、最終的なスケジュール確認、事前集金(集合から解散までの交通費・団体入場料金・宿泊代金)、7月15日に締め切った文献要旨に筆者が推敲を施して簡易製本した『文献要旨集』を配布した。この『文献要旨集』は配布するだけでは意味が無いため、各受講生には「自身が担当していない文献のうちから、現地授業で訪問する4地域(出雲大社、石見銀山、萩、津和野)それぞれから1本ずつを選び、その選定理由を8月10日までにEメール添付にて提出」との課題を出した。

V. 付録と続編(第2報)、現地授業をまとめた小稿の紹介—むすびに代えて—

本稿および香川(2022a)の付録は、全ての文献のAbstractが5行で統一されている。これは受講生が文献要旨を執筆する時点でも必ずテンプレート上で5行にするよう指示しているためである。ただし、本稿の付録は組版との関係で上記のテンプレートとは1行あたりの文字数が若干異なる。テンプレート上で5行に整えるため、受講生は192～240字の間で各文献の要旨をまとめなければならない。このように厳し過ぎるような制約を課しているのは、本稿の参考文献欄に列挙した前例とも共通するが、受講生が社会人となったときに字数制限が厳しい書類の執筆を命じられても上手く対応できるように文書作成の鍛錬を兼ねているからである。

受講生がまとめた各文献のキーワードと要旨は、全て筆者が精査して推敲しつつ成績評価の素材とした。評価基準は、①指定した執筆様式を守れているか否か、②文献要旨のまとまりと明快さ、これら2つを評価の観点とした。キーワードについては、既に文献に記載されている場合はその一部流用を認めたため、原著論文で不適切なキーワードが示されているケースがあると考えて評価対象から外した。参考文献欄に続く付録は、受講生による成果を授業担当者である筆者が推敲し、筆者自身が要旨作成を担当した成果とともに列挙したものである。配列順序は訪問地域ごとに原著論文筆頭著者の50音順とした。紙幅の制約により、本稿には最初の訪問地である出雲大社とその周辺に関する文献13件、萩を扱った文献20件の要旨を載せており、本稿の続編にあたる香川(2022a)には石見銀山と津和野に関する文献要旨を収録している。

なお、現地授業の備忘録は香川 (2022b) にまとめている。併せて参照いただき、これらが現地訪問をする方々にとって少しでも役立つことになれば幸いである。

謝辞

コロナ禍が急速に深刻さを増すなか、私たちの徹底した感染抑止策を好意的にご理解いただき、私たち一行を快く受け入れてくださった現地の皆様に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献 (本文の付録で扱った文献は書誌情報の重複を避けるため当欄では割愛)

- 香川貴志 (2011) 歴史的遺産の「まちづくり」への応用から学ぶ一津和野, 萩, 石見銀山を巡るフィールドトリップ, 平成 22 (2010) 年度「地理学特講 (地理学臨地実習)」の覚え書き一. 『京都教育大学教育実勢研究紀要』, **11**, pp. 1-11.
- 香川貴志 (2013) 東日本大震災を受けての防災教育普及のための取組—さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証一. 『京都教育大学紀要』, **123**, pp. 31-45.
- 香川貴志 (2015a) 阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える (第 1 報). 『京都教育大学環境教育研究年報』, **23**, pp. 7-15.
- 香川貴志 (2015b) 阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える (第 2 報). 『京都教育大学環境教育研究年報』, **23**, pp. 17-25.
- 香川貴志 (2016) 懐かしさを感じる街を歩くための事前学習の記録—門司港レトロ, 豊後高田「昭和の町」, 別府温泉郷を事例として一. 『京都教育大学環境教育研究年報』, **24**, pp. 1-14.
- 香川貴志 (2017a) 飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録 (第 1 報). 『京都教育大学環境教育研究年報』, **25**, pp. 31-44.
- 香川貴志 (2017b) 飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録 (第 2 報). 『京都教育大学環境教育研究年報』, **25**, pp. 45-66.
- 香川貴志 (2018a) 三陸地域で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究— (第 1 報). 『京都教育大学環境教育研究年報』, **26**, pp. 25-37.
- 香川貴志 (2018b) 三陸地域で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究— (第 2 報). 『京都教育大学環境教育研究年報』, **26**, pp. 39-46.
- 香川貴志 (2019) 重要伝統的建造物群保存地区を学ぶための基礎文献と地形図読図課題—愛媛県西予市卯之町および喜多郡内子町の場合—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, **27**, pp. 53-64.
- 香川貴志 (2020) 福島県内の重要伝統的建造物群保存地区および会津若松に関する基礎文献とその要旨. 『京都教育大学環境教育研究年報』, **28**, pp. 53-64.
- 香川貴志 (2021) 重要伝統的建造物群保存地区を活用した教材作成のための事前学習の記録—中山道妻籠宿, 奈良井宿, 木曾平沢に関する文献研究—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, **29**, pp. 1-12.
- 香川貴志 (2022a) 出雲大社, 石見銀山, 萩と津和野を巡るための文献研究の記録 (第 2 報)

—最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, **30**, pp. 73-86.

香川貴志 (2022b) COVID-19 拡大抑止に熟慮したフィールドトリップの実践—出雲大社, 石見銀山, 萩, 津和野を巡る 2021 (令和3) 年度「地理学研究」の覚え書き—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, **30**, pp. 87-102.

野間晴雄・香川貴志・土平 博・山田周二・河角龍典・小原文明 (2017) 『第2版 ジオ・パル NEO—地理学・地域調査便利帖—』海青社.

付録 (事前学習で扱った文献の要旨)

★ COVID-19 対応のため, 原則的に本学所蔵資料, J-STAGEやIR (機関リポジトリ) で無償ダウンロード可能な文献 (一部は他機関からの取り寄せを要する文献も含む) について受講生が要旨をまとめ, それを香川が推敲のうえ整えた。無償ダウンロードができない文献の約半数および外国語で書かれた文献については, 原則として香川が他機関から取り寄せて要旨をまとめた。

「出雲大社」で検索してヒットするもののうち, 地理学に関連が深いと考えられる 2000 年以降に発行された 6 頁以上の文献を選別した。ただし, 内容が類似していると考えられる文献は新しい方を優先記載している。なお, 「出雲大社」はキーワードから割愛した。

▼ Z01

Reference : 有馬健一郎・中野茂夫・村上 亮 (2012). 出雲市における伝統的町並みの特徴と行政支援による町並み形成に関する取り組み—大社町と平田町を事例に—. 都市計画論文集, **47** (3), 703-708.

Key Words : 修景事業, 伝統的町並み, 住民協定, 大社町, 平田町

Abstract : 近年, 出雲市では, 大社町と平田町の二つの町でそれぞれの特徴を生かした伝統的町並みの整備が実施されている。それは伝統的町並みをつくる修景事業であり, 両町に共通していた行政支援は, 補助金の交付に留まらず, まちづくり団体を中心とした住民協定の策定にも及んだ。しかし, 大社町は修景基準と町並みが適合していることに対し, 平田町では十二分な適合がみられないことが問題視されていた。そのため, 今後に修景事業を行う際には, 重伝建選定を視程に収めたきめ細やかな基準が必要になってくるだろう。

▼ Z02

Reference : 柏木千春 (2017). 観光客流入の最適化を図る来訪者管理のフレームワークに関する考察—島根県出雲大社周辺の事例研究—. 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌, **27**, 19-28.

Key Words : 観光資源, 観光客流入, TDM, 渋滞緩和, 道路情報

Abstract : 本研究では出雲市を対象としたTDM研究を中心に据えている。TDMとは, 最適な移動手段や経路を提示し観光地の状況に即した行動を促すことで渋滞緩和などに繋げ, 観光客の満足度と住民の住みやすさの維持向上を図ることである。出雲大社周辺では慢性的な渋滞を緩和するため, 駐車場の借上や案内板の導入, リアルタイムでの道路情報等を提供することで渋滞解消をみた。この取組を行う際, 住民からの理解, 事業者や観光客の協力を得た。いわば, 住民・事業者・観光客が一体となった取組が実現した。

▼ Z03

Reference : 工藤泰子 (2014). 出雲大社と近代観光. 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, **52**,

41-49.

Key Words : 山陰本線, 一畑電鉄, 観光客, 観光振興, 超高齢化社会**Abstract** : 山陰本線から大社線が延伸したことで, 一畑電鉄とともに鉄道を利用した出雲大社訪問が普遍化し観光客が増加した。大正期から昭和初期には様々な宣伝活動が試行錯誤された。しかし, 現代の観光振興は域内の連携が旧来よりも希薄になっているように思われる。加えて今日では, 出雲地方における移手段の多くが自動車に依存している。今後は超高齢化社会, 環境への配慮という観点からも, 公共交通機関の充実を図り, 観光客と住民の双方が利用しやすい環境を創出して, 情報発信に努めることが必要であろう。**▼ Z04****Reference** : 土屋武之 (2014). 出雲大社平成の大遷宮でにぎわう一畑電車. 鉄道ジャーナル, **48** (3), 86-95.**Key Words** : 一畑電車, 参拝客, 女性客, 定期券客, 行政**Abstract** : かつて出雲大社の参拝客輸送の需要は一畑電車が支えていたが, 現在では一畑電車を利用する者は参拝客のうち僅か2~3%を数えるに過ぎず, 歴史ある地域の公共交通機関の永続的な存続が危ぶまれている。そうした現状に対し, 島根県がスポンサーとなりラッピング電車「しまねっこ号」を導入して女性客の利用を促進したり, 出雲大社の大遷宮に伴い参拝客獲得を狙ったダイヤ改正をしたりしたことで改善の兆しが見えている。一方, 定期券客が大きく落ち込んでおり, 行政の支援や新型車両の投入が望まれる。**▼ Z05****Reference** : 原 遼平 (2019). 昭和一五年度の宿帳に見る戦時中に出雲大社参詣. 史境, **77・78**, 93-110.**Key Words** : 宿帳, 行楽目的, 決戦非常措置, 旅行委制限, 紀元2600年**Abstract** : 1944 (昭和19) 年に出された「決戦非常措置ニ基ク旅行輸送ノ制限ニ関スル件」によって戦時下には旅行が行われていなかったとみなす傾向があった。しかし, 旅館の宿帳をもとに昭和15年2月~16年4月の宿泊者数をみると, 非常措置が出されるまでは, 戦時下においても, 政府の意に反して出雲大社は山陰地方で最も重視される観光地であったことが判明した。また, 出雲大社のみを目的とする旅行もあったが, 参拝の帰りに近隣の温泉地などに立ち寄る旅行も一定数認められたことが明らかになった。**▼ Z06****Reference** : 福井のり子・森山昌幸・三島慎也・鈴木春菜・藤原章正 (2014). まち歩き促進に向けた観光モビリティ・マネジメントの取り組み—出雲大社周辺を対象として—. 土木学会論文集D3 (土木計画学), **70** (5), I_1087-I_1094.**Key Words** : モビリティ・マネジメント, まち歩き, パンフレット, クーポン, 駐車場**Abstract** : モビリティ・マネジメント (MM) は, モーターリゼーションの進展による環境の課題を克服するのみならず, 観光地における観光客の満足度を高める役割も担っている。しかし, 観光地でモビリティ・マネジメントを実施している例は少ない。本稿では出雲大社周辺でその効果について検証している。結果として, 事前の情報提供により「まち歩き」の動機付けという効果が得られ, 観光客の満足度を高められたが, 観光客の属性は常時変化するため, 十分な効果を得るためにはMMの継続的な実施が不可欠である。**▼ Z07****Reference** : 福井のり子・森山昌幸・黒田耕一・西村成人・藤原敏弘・佐々木洋・竹原正友・藤原章正 (2015). 道路整備事業の事業段階におけるコミュニケーションツールとしてのオープンハウスの役割. 土木学会論文集D3 (土木計画学), **71** (5), I_101-I_109.**Key Words** : 道路整備事業, オープンハウス, 第三者, コミュニケーション, 合意形成**Abstract** : 本論文は, 道路整備事業の事業段階においてコミュニケーションツールとして開設されたオープンハウスが果たした役割や効用について考察した研究である。オープンハウスでは, 中立な「第三者」としてスタッフが最新の情報提供を行い, イベントへ参加したりすることを通して周辺住民や店舗との交流が活発になった。

その結果、住民の細かな意見の収集が実現し、当初は事業に好意的でなかった住民の態度変容がみられた。さらに観光客には、そのニーズに合った対応を行い、それが観光満足度の向上をもたらした。

▼ Z08

Reference : 藤田富士夫 (2006). 古代出雲大社本殿成立のプロセスに関する考古学的考察. 立正史学, **99**, 121-137.

Key Words : 巨大木柱遺構, 椋山林継, 森浩一, 日本海文化, 環状列石

Abstract : 2000 (平成 12) 年の出雲大社境内地の発掘調査で巨大な柱材が出土し、この発掘によって、古代出雲大社が巨大神殿であったことが有力になった。そして、なぜ巨大な柱材を用いた建築構造であったのか多くの研究者の中で様々な学説が発表された。本論文において筆者は、椋山林継氏と森浩一氏の 2 人の主張にフォーカスして比較考察を行った。さらに、伝統的な地域力を重視する出雲文化とともに、その伝統的な地域リーグの源淵はどこにあるのかという観点のもと、出雲大社本殿成立のプロセスの私考が展開される。

▼ Z09

Reference : 藤原昇汰・鈴木春菜・永野慶太 (2000). 観光地におけるインフラ整備の中期効果の検討—出雲大社参詣道の整備を事例として—. 実践政策学, **1**, 33-42. ,

Key Words : 観光, インフラ整備, 中長期的評価, 満足度, 観光情報調査

Abstract : 従来の研究例は、インフラ整備直後の観光動態による評価が中心であったが、本研究では、インフラ整備が観光地へ及ぼす中長期的な効果の検討がなされている。観光地におけるインフラ整備は、時間価値、利益、利用者数を向上させ、観光の質向上にともなう地域活性化につながる可能性が検証された。また、その効果は整備直後だけでなく、中期的に顕在化し拡大するものだと考えられる。長期的には、地域住民との関わりなど地域全体への波及効果が見込めるため、継続的かつ広域的な検討や取組が要請される。

▼ Z10

Reference : 三谷 徹 (2009). 風土記の庭—島根県立古代出雲歴史博物館ランドスケープの設計プロセスにみられる物理的特性と文学的特性に関する省察—. 食と緑の科学, **63**, 1-8.

Key Words : 島根県立古代出雲歴史博物館, 出雲国風土記, 文学性, 築地松, 地理的特性

Abstract : 島根県立古代出雲歴史博物館は、出雲大社から指呼の地に建設された庭を伴う博物館である。著者は設計段階から竣工まで関与した立場から本研究をまとめている。当博物館のデザインコンセプトは、出雲国風土記にも記された宍道湖や周囲の山々、人々の生活や文化に裏打ちされた散村の築地松など、当地の地理的特性を文学性にまで昇華させて巧みに取り入れている。博物館の建物のみならず、出雲大社から博物館に至るまでに展開するオープンスペースとしての庭園も、博物館の景観を構成する大切な要素である。

▼ Z11

Reference : 森山昌幸 (2012). 出雲大社における参詣道整備について—まち歩き観光促進によるにぎわい創出をめざして—. 運輸と経済, **72** (2), 53-58.

Key Words : 神門通り, 道路景観整備事業, にぎわい創出, 合意形成, シェアド・スペース

Abstract : 本論文は、出雲大社の神門通りの道路景観整備事業を中心とした門前町のにぎわい創出の取組を記録した報告である。神門通りは、歩道幅が狭く観光客が二列になって歩くことが難しいことが指摘されており、歩行者の安全と快適の担保、そして自動車の円滑な通行の両立が必要であった。ここでは、その両立のために、周辺住民や道路の利用者とワークショップやアンケートなどを通じて合意形成を図りつつ、歩行者・自動車の相互の安全意識を高めるシェアド・スペースという手法の取り入れが行われるに至った。

▼ Z12

Reference : 山下一也・石橋照子・大森眞澄・松本玄智江・小田美紀子・藤田小矢香・林 健司・松谷ひろみ・日野雅洋・宇原 均・工藤裕司 (2018). 出雲観光におけるストレス対策としてのサウンドスケープの可能性. 島

根県立大学出雲キャンパス紀要, **13**, 133-138.

Key Words : ヘルスツーリズム, メディカルツーリズム, 出雲観光, ストレス対策, インバウンド

Abstract : 本論文は, 出雲観光におけるヘルスツーリズムの可能性を検討している。ヘルスツーリズムとは旅を契機として健康増進・回復に寄与するものと定義され, 人の行動変容が期待できる。近年アジア近隣諸国では観光消費率が高いことから, 医療目的の観光交流であるメディカルツーリズムが積極的に展開されているが, まだ改善の余地がある。そこで, 島根県立大学は実証実験を基に, 出雲地域の強みである観光・医療・経営の3分野を合わせて, ヘルスツーリズムを企画し, その旅行商品化を目指している。

▼ Z13

Reference : 吉城秀治・橋本成仁 (2014). 街路空間整備を通じた交通安全対策に関する地域住民の意識構造—出雲大社・神門通りを対象として—. 都市計画論文集, **49** (2), 157-167.

Key Words : 意識変化, 安全対策, ドライバー意識, 歩行者意識, 沿道整備

Abstract : 本稿は, 自動車事故の低減を目的として, 街路整備と空間デザインを一体化した安全整備とその効果を検証した論文である。街路空間を再構築することは, 自動車のみならず街路利用者 (歩行者) にとっても安全で快適な空間にするという含意がある。整備の結果, 事故の因子として過度な自動車走行速度が挙げられるが, 沿道整備後は約 3.3km/h の低下が確認され, 歩行者にとっても一層安全で快適な空間となった。このように歩車双方の安全を実現できるトータルな街路整備は優れた社会資本になると考えられる。

「萩市」で検索してヒットするもののうち, 地理学に関連が深いと考えられる 2010 年以降に発行された 5 頁以上の文献を選別した。ただし, 内容が類似していると考えられる文献は新しい方を優先記載している。なお, 「萩」と「萩市」はキーワードから割愛している。

▼ H01

Reference : 池田廣司・静屋 智 (2016). 萩市におけるコミュニティ・スクール構想—「やまぐち型地域連携教育推進事業」の取組を通じて—. 教育実践総合センター研究紀要, **41**, 127-137.

Key Words : 学校運営協議会, コミュニティ・スクール, 地域協育ネット, 小中連携カリキュラム, 小中共同テーマ

Abstract : 本論文は, 「やまぐち型地域連携協育推進事業」を通して, 萩市のコミュニティ・スクールの現状や成果・今後の構想について論じたものである。萩市では, 中学校 4 校区内の小中学校 12 校をモデル校とし, 地域ぐるみで子どもの学びや育ちを支援する地域協育ネットを構築し, 小中連携カリキュラムの導入, 小中共同テーマによる授業などが実施されている。今後の課題や方向性として, 学校運営協議会の成長・成熟を促すこと, 地域住民の間にコミュニティ・スクールの認知度を高めることの 2 点が挙げられている。

▼ H02

Reference : 石垣編集部 (2012). まちの解体新書 山口県萩市—維新の志にあふれる観光都市 至る所に「おたから」が点在—. 石垣, **31** (10), 39-43,

Key Words : 商工会議所, 地域資源, 萩まちじゅう博物館, 竹ブランド化, 魚ブランド化

Abstract : 萩といえば, 全国的にも早くからその歴史的街並みの景観を保存し, 近世の景観を保つ武家屋敷や寺社などを生かした観光地として著名である。しかし, 平成の広域合併により地域間競争の激化が予想される中, その競争を勝ち抜くために, 商工会議所を中心に, 歴史の町に加えて萩の新たな地域資源を活用して更なる発展を目指した。注目したのは, 竹産業の復活と近海で取れる多種多様な地魚のブランド化である。さらに地域住民への参画を意識した「萩まちじゅう博物館」構想では担い手の育成にも力を入れている。

▼ H03

Reference : 梅木幹司・志村哲郎 (2016). 萩市D地区独居高齢者の生活課題に着目したインタビュー調査. 至誠館大学研究紀要, **3**, 67-74.

Key Words : 独居高齢者, 近隣住民, 地域包括ケアシステム, 生活課題, 見守り活動

Abstract : 本論文では, 地方都市の独居高齢者の生活課題を明らかにするための手がかりとして, 中山間地域にあって過疎の進んだ萩市D地区に住む独居高齢者にインタビュー調査を行って実施した研究である。その結果, 食生活の維持や移動手段, 健康状況, 他者や家族とのつながり, 農業の存続などが課題として上げられている。これらの課題については, 地域の人々による互助などが注目されているが, それは希薄化しつつあり, 孤独死がみられることから積極的な日常の見守り活動などが今後より必要性を高めるだろう。

▼ H04

Reference : 大槻洋二 (2018). 山口県萩市 萩市伝統的建造物群保存地区保存条例—伝統的建造物の活用に向けた条例の一部改正—. 自治体法務研究, **54**, 50-55.

Key Words : 萩まちじゅう博物館構想, 伝建法 (萩市伝統的建造物群保存地区保存条例), 建築基準法

Abstract : 萩市では「萩まちじゅう博物館構想」を主要施策の一つとした町づくりが進められている。しかし, 元来住宅であった伝統的建造物を, 地区の町並み交流館として一般に公開しようとする, 建築基準法に抵触する「用途変更」に当たるため, 伝建条例の改正を行った。具体的には, 商業施設のうち「文化的価値を有するものとして内部を公開する用途に供するもの」に定め, 現状変更の規制対象外となる条項を加えた。これにより, 住宅の用途変更への規制を一部で緩和できるようになった。

▼ H05

Reference : 岡崎祐介・福田一義 (2017), 第16回維新の里萩城下町マラソンに関する調査報告. 至誠館大学研究紀要, **4**, 71-82.

Key Words : マラソン, イベント, アンケート調査, 参加者, 回答者

Abstract : 本論文では, 実行委員会が作成, 集計したアンケート調査票を基に, 今後の大会運営に役立つ基礎資料を得るため, 城下町マラソンにおける参加者の属性, 満足度, 大会参加の意図などの把握することが目的に据えられている。参加者の肯定的な意見が多くある一方で, 不満も多数挙げられている。調査に当たった課題として, 調査票の回収率を向上させるため調査内容や配布, 回収の方法の再検討が挙げられる。課題の改善により, 大会参加者の全体像を一層詳細に把握することが求められると主張されている。

▼ H06

Reference : 神谷大介・赤松良久・渡邊学歩・大槻順朗・二瓶泰雄・上鶴朔悟 (2014). 小規模集落における豪雨災害に対する課題と支援方策—萩市徳佐地区を対象として—. 土木学会論文集G (環境), **70** (5), I_87-I_94.

Key Words : 気候変動, 自助・共助, 過疎高齢化, 地区防災計画, 避難訓練

Abstract : 本論文には, 気候変動に対する行政の対応とともに, 当該地区の防災に関する計画として, 自助と共助の考えが示されている。自分自身で対策を立てることが望ましいが, 当該地域の過疎高齢化を加味して考えると, その限りではない。行政が発出する避難指示に従って, 各時点の状況に合わせて避難する必要がある。そこで重要とされているのは, 行政と住民による避難訓練のシミュレーションである。地区防災計画の活用と合わせて, 住民と行政との間で災害に関する情報を共有・周知しておくことが強く求められる。

▼ H07

Reference : 萩市観光協会 (2015). 地域と共生するFFG 幕末維新のくに長州・萩へ.FFG調査月報, **85**, 36-47.

Key Words : 萩城下町, 花燃ゆ, 萩反射炉, 吉田松陰, 松下村塾

Abstract : 幕末維新を支えた藩士の多くは萩の地で育成された。この地は 2015 年NHK大河ドラマ『花燃ゆ』の舞台に抜擢され、新たな萩市の観光スポットとして「花燃ゆ大河ドラマ館」が開館された。吉田松陰ゆかりの松下村塾はもとより、萩反射炉は「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産にも登録されている。他にも吉田松陰の生誕地や木戸孝允旧宅など、幕末維新ゆかりの地が萩市に多く点在している。このように本論文は、吉田松陰に関連した萩市の名所旧跡や食文化を中心にまとめられたものである。

▼ H08

Reference : 福島一人 (2018). 観光英語 (14) 島根県大田市, 山口県萩市, 福岡県宗像市の観光名所に見られる案内板の英語. 情報研究, **59**, 1-23.

Key Words : 世界遺産, 英語説明, 龍源寺間歩, 松下村塾, 萩反射炉

Abstract : 本論文は、世界遺産を抱える島根県大田市 (石見銀山), 山口県萩市 (松下村塾, 萩反射炉), 福岡県宗像市 (宗像大社) にみられる英語併記の観光案内板を調べ、その改善課題を指摘した研究である。案内板には簡潔な説明が望まれるが、細かすぎる説明で深入りした案内板が散見された。英語で説明する際は、日本語の事物名をイタリック体のアルファベットで表記するだけでなく“the Shoukason-juku (-private school)”のように翻訳的な補足説明が必要であることが主張されている。

▼ H09

Reference : 古屋昭雄・北村英子・沢 勲・藤田康雄 (2018). 山口県萩市, 明治維新, 松陰神社の由来と文化—松門神社, 松下村塾, 吉田松陰, 明治維新, 歴代総理大臣—。洞窟環境Net学会紀要, **9** (1), 37-56.

Key Words : 松門神社, 松下村塾, 吉田松陰, 伊藤博文, 幽囚旧宅

Abstract : 本論文は、地域の歴史を解明し、文化遺産の資料作成を図ることを目的に据えたものである。対象は松門神社と松下村塾で、松門神社は吉田松陰の実家敷地にあり、後に総理大臣となった伊藤博文らが中心となって県社としての列格を請願したものである。また、密航を企てて失敗に終わった松陰が幽閉された幽囚旧宅に関する記述も注目に値する。全体を通じて資料や写真が豊富に掲載されており、それゆえに読解に時間を要するが当初の目的は十分に果たしていると評価できよう。

▼ H10

Reference : 三島幸子・中園真人・石橋風砂・山本幸子・孔 相権 (2017). 社会福祉事業団による高齢者通所介護施設の整備プロセスと利用特性—山口県萩市を対象として—。日本建築学会計画系論文集, **82** (732), 353-361.

Key Words : 社会福祉事業団, 高齢者通所介護施設, 整備プロセス, 施設立地, 利用圏

Abstract : 本研究は、独自の社会福祉事業団を持ち、町村合併で生まれた広域自治体全域で高齢者施設整備を進める萩市を対象に、旧市域の高齢者通所介護施設の整備過程を整理し、施設の利用特性、運営形態の特徴及び施設整備効果の解明に努めている。その知見を基に事業団を主とした施設整備手法の有効性が検証される。事業団による施設整備効果は相応にあり、旧市町村の既設福祉施設群の総合的な管理運営と新たな整備を担う組織形態の候補として、事業団方式の導入が検討に値する有効な手法であると提言されている。

▼ H11

Reference : 村上佳代・西山徳明 (2010). 萩市における文化資源の発掘と都市遺産概念について—歴史文化まちづくりにおける文化資源マネジメントに関する研究 (その1) —。日本建築学会計画系論文集, **75** (657), 2615-2623.

Key Words : 文化資源マネジメント, 歴史文化まちづくり, エコミュージアム, 都市遺産, 真正性

Abstract : 本論文は、全国でも先進的な「萩まち博」という文化遺産を生かしたまちづくりの概念の登場背景や理念構築のプロセス、形成された理念を実現させるためのシステムを具体的に分析した研究である。従来の文化遺産の枠を超えて、生活空間を生活遺産や空間遺産からなるトータルな文化遺産と捉えるのが「萩まち博」

最大の特徴である。これまで忘れ去られようとしていたモノやコトは息を吹き込まれ、これらが持つ固有の価値が顕在化される。こうして拾い上げられる概念こそが都市遺産の基盤となっている。

▼ H12

Reference : 村上佳代・西山徳明 (2015). 国際協力を通じたエコミュージアム観光開発技術による文化資源マネジメントの試みに関する研究—山口県萩市とヨルダン・ハシミテ王国サルト市を事例として—. 都市計画論文集, 50 (3), 1188-1195.

Key Words : エコミュージアム, 屋根のない博物館, 国際協力, 文化資源マネジメント, JICA

Abstract : 本論文は、萩まちじゅう博物館モデル及びそのエコミュージアム観光開発への適用プロセスを検証し、技術移転上での課題抽出を行うことを目的としている。エコミュージアムとは一定の地域を「屋根のない博物館」と見立て、その地域資源を保存・展示していく博物館活動のことで、住民主体のまちづくりが可能となる。JICA事業を通じて萩まち博モデルが保守的なヨルダンのサルト社会に適用されたことは功を奏したといえるだろう。しかし、博物館活動における学芸機能の担保については課題が残されている。

▼ H13

Reference : 村木名史・揚井正明・国広勝代 (2011). 山口県萩市、長門市および阿武町における野外教育の計画実施状況. 山口福祉文化大学研究紀要, 4, 109-114.

Key Words : 野外教育, 離島, 福祉, カヌー, プログラム開発

Abstract : 野外教育は「自然・人・体験」の3要素を柱にした学際領域として位置付けられ、教育現場において重要な役割を担っている。しかし、野外教育の現場では、実施期間の短さや一貫したプログラム設計の欠如など多くの課題を残しているのが実状である。そこで、北長門海岸国定公園や秋吉台国定公園という全国に誇り得る自然的環境を擁する山口県では、課題を克服した野外教育の新規プログラム開発の可能性が高いと考えられる。このことを踏まえて、本研究では山口県北浦地区の野外教育の実施状況が調査されている。

▼ H14

Reference : 村木名史・金子壽一・辻 紘良 (2012). インターネットから利用可能な「萩市障がい者・高齢者用ガイドマップ」の構築. 山口福祉文化大学研究紀要, 6, 157-162.

Key Words : インターネット, 障がい者, 高齢者, 車いす, ガイドマップ

Abstract : 本研究は、車いす利用者の移動に伴う負担量の少ない経路をインターネットの活用で探索するシステム構築を目指し、その基盤となる「障がい者・高齢者用ガイドマップ」作成を当面の目的としている。山口県萩市の萩地域を対象にガイドマップを作成し、障がい者・高齢者及び車いす利用者用設備 20 項目を調査項目とし、選定した 10 施設の設備設置状況をインターネット経由で閲覧可能にした。今後は位置情報機能が備わったナビゲーション機器との連携及び移動負担速度を伝達する色彩表示等の改善を目指している。

▼ H15

Reference : 村木名史・藤原亮治・山根真紀 (2013). 山口県萩市におけるスポーツ推進計画策定を目指したスポーツ活動に関するアンケート調査用紙の作成. 山口福祉文化大学研究紀要, 7, 17-24.

Key Words : スポーツ基本法, スポーツ基本計画, 山口県スポーツ推進条例, アンケート調査, 地域特性

Abstract : 山口県萩市では、市民が一生涯にわたってスポーツを行い、そこからスポーツを通じて地域復興していくことを目指している。そのため、市全体で協力して取り組める市独自のスポーツ推進計画を策定することを目的として、調査対象である 20 歳以上の 1500 人に対し、アンケート調査を実施した。その結果、「スポーツ基本法」や「スポーツ基本計画」、「山口県スポーツ推進条例」、「山口県スポーツ戦略プラン」に基づいた山口県萩市の計画は 12 分野にわたり、その地域的特性を盛り込んだものに仕上がった。

▼ H16

Reference : やまぐち経済月報編集部 (2016). 世界文化遺産登録で賑わう萩市の 5 資産—観光客の増加を一過

性に終わらせない戦略的な観光振興策を一. やまぐち経済月報, 490, 2-11.

Key Words : 持続可能な観光地, 世界文化遺産登録, 地域住民, おもてなし, 受入対策

Abstract : 萩市は全国に先駆けて1972年より町並みの保存に取り組んできた。さらに2015年「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼, 造船, 石炭産業」が世界文化遺産に登録された。他の登録地と同様, 登録が観光客の増加を保障するものではない。この産業遺産は広範囲に及び, 観光資源としてまとまりを欠くという難点もあり, 持続可能な観光地を目指すための官民協働の施策が求められる。行政による受入体制の整備, 住民によるおもてなし, 県内外の連携体制の強化による観光周遊ルート開発などが模索され続けている。

▼ H17

Reference : 山田真治 (2016). 山口県萩市, 小学校統合化による新校歌—萩市立福栄小学校校歌—. 至誠館大学研究紀要, 3, 85-90.

Key Words : 小学校統廃合, 校歌, 中田喜直, 借用和音, 地域文化

Abstract : 小学校2校が統廃合されて設立された福栄小学校の校歌を作詞することになり, 中田喜直氏の作風を取り入れつつ子供たちにも歌いやすい, 日本語を大切にされた校歌を作成することになった。メロディはハ長調で音域も無理ないものとし, 伴奏は児童にも弾ける程度ながら借用和音を取り入れたものになった。歌詞は歌いやすく, かつ覚えやすい平易なものとした。作曲に携わって気付いたことは, 地元の居住者にとっては言葉のイントネーションのみならず, 横の響きにも地域文化があると評価されていることだった。

▼ H18

Reference : 横山順一 (2012). 山口県萩市における高齢者の災害時の意識と地域福祉. 山口福祉文化大学研究紀要, 6, 11-20.

Key Words : 災害時要援護者, 保健福祉計画, 町内会, 共助, 地域の輪づくり

Abstract : 本論文は, 身体能力等が低下し避難等に支援を要する要支援者に注目し, その結果及び萩全体の対策等を踏まえ, 今後実現し得る対策として何が必要なのかを提言している。避難に関しては住民間に温度差がある。また, 同一地域の住民間にも居住歴等により溝ができやすい。これを放置していると災害時の避難での助け合いは難しい。今後の課題として, 共助の要である町内会等の地域ネットワークの緊密化を実現するには, 対等な立場での意見交換や日常の交流関係を構築しておくことが肝要である。

▼ H19

Reference : 横山順一 (2015). 地方における災害時要援護者支援と地域連帯—萩市A地域の防災調査を手掛りに—. 至誠館大学研究紀要, 1, 41-48.

Key Words : 災害ソーシャルワーク, 災害時要援護者, 仮設住宅, 地域連帯, 近助

Abstract : 災害ソーシャルワークでは, 防災や減災, 災害発生後の救出や避難, 避難所や仮設住宅での生活, 復興などそれぞれの段階に固有のニーズを抱えている。とりわけ, 防災や減災については地域で実効的な助け合いが常時可能な絆づくりが大切である。本研究の事例地域である萩市A地域では高齢化が進み, 災害時要援護者が全体の36.4%にも及ぶと推定される。災害時要援護者には, 近所の人々が普段から程よい距離感で関心を持ち, 有事の際に迅速な助け合いができる『近助』の体制を構築することが重要になってくる。

▼ H20

Reference : Zou Miao (2017). 山口県における農鍛冶の技術文化に関する研究—山口県萩市野田鍛冶所の例として—. やまぐち地域社会研究, 14, 183-194.

Key Words : 民具, 鍛冶屋, 盛業携帯, 農鍛冶, 野田鍛冶所

Abstract : 鉄を利用して民具(生業等で使う道具や器具)を製造する鍛冶屋は, 人間と自然の対話の通訳と考えることができる。鍛冶屋を考察することを通じて, 地域の自然風土, 生業形態, 人々と自然との繋がり, 人々の考え方を捉え理解することが可能となる。そこで, 本研究では, 山口県萩市で現在も農鍛冶として活動を続

けている野田鍛造所を研究対象として、ここで製造・修理される農具を通してみることのできる、人々と自然の繋がり、さらにはその変化についての考察を行っている。